都道府県別賞一等

温かい支え合いのバトン
～一枚の生命保険証書が教えてくれたこと～

山口県　光市立室積中学校　二学年
鯨吉　翔

「高額な手術費、入院費を払えますか。」

もしも、そんな問いが目の前に突きつけられたら、僕達はどうするだろう。今まで大きな病気もせず元気に過ごしてきた僕にとって、「生命保険」という言葉は、自分には関係のない大人の世界の話だとばかり思っていた。しかし、数年前のある日、そんなのんきな考えが一気に吹き飛んでしまう出来事があった。

大切な祖父に「ガン」が見つかったのだ。信じられない気持ちと、こみ上げてくる強い不安。しかし、一番こわくてつらいのは祖父自身のはずだ。祖母は病院でつきっきりになり、祈るような気持ちで検査結果を待った。そのときの胸に迫る不安は、言葉では表現できないほどだった。

「すぐに手術が必要です。」

医師からの宣告に、家の中の空気は一気に重くなった。手術当日、僕達は無事を祈るしかなかった。長い手術の末、無事に成功したと聞いたとき、家族全員が心の底から安心した。

しかし、命が助かった喜びの裏で、もう一つリアルな問題がのしかかってきた。手術代や入院費など、想定以上の費用がかかったことだ。経済的な不安から、家族の雰囲気が悪くなった。そんなとき、我が家を救ってくれたのが、「一枚の生命保険証書」だった。祖父はもしものときのために保険に入っていたのだ。祖母が手続きをするとまとまったお金が入り、我が家にいつもの明るい毎日が戻ってきた。祖父は、照れくさそうに笑顔で言った。「ずっと元気だったから、保険料を払い続けて損をしたと思ったこともあったんだ。でも、払ってきたお金は、どこかで困っている誰かのために使われていたんだね。そして今度は、自分がみんなに助けられたんだ。」

その言葉を聞き僕はハッとさせられた。保険とは、自分一人のためのものではない。元気なときに少しずつお金を出し合い、誰かが困ったときに助け合う。言ってみれば〝目に見えない宝物〟なのだ。

祖父の手術から数年後、我が家は再び、保険に救われることになる。親戚のおばさんに介護が必要となり、一人で抱え込んでいた祖母は疲れ果てていた。そんなとき、介護保険が利用できると分かったのだ。目の前が急に明るくなった感じがした。祖母がすぐに手続きをとり、おばさんは施設に入所できた。起き

上がるのが難しい状態でも、手厚いサポートを受けながらおだやかな日々を過ごすことができたのだ。

「あのまま私一人で介護を続けていたら、きっと二人とも倒れていただろうね。保険のおかげで本当に救われたよ。」祖母はかみしめるように言った。その表情を見たとき、僕の『保険って必要なのかな。』という疑問は、『絶対に必要だ。』という強い確信に変わった。

人間は、決して一人では生きていけない。みんながお互いに支え合って初めて生活が成り立っている。社会が成り立っている。誰かが困ったときはみんなで手を差し伸べ、助けられた人は、また別の誰かを助ける。保険とは、人間がみんなで幸せに生きていくために作られた最高の「助け合い」の絆なのだ。

「一枚の生命保険証書」が教えてくれたのは、お金の大切さだけではない。会ったことのない名前も顔も知らない人でも助けようとする人間の優しさ、家族の未来を守ってくれる安心感。そして誰かを想う温かい希望。保険は、僕達の未来をつないでくれている。

僕が大人になったら、今度は僕が誰かを支える番だ。これからもっと社会について深く学び、誰かの痛みに寄り添えるような優しくたくましい大人になりたい。世界の誰もがお金の不安で涙を流すことなく、人が人を想う保険という「温かい支え合いのバトン」が、これから世代を超えてもずっと続いていくように。